

2020年7月26日 聖餐式説教

マタイによる福音書は、よくバームクーヘンの福音書と言われております。これは、主イエスの物語と教えが大変順序よく並べて書かれているからです。これはマタイが意図的に編集したためと言われております。

マタイによる福音書1章から28章全体を山にたとえますと、その頂点になるのが13章で、天国のたとえ話その内容になっております。主イエスの教えの中で最も重要なのが天国のたとえ話であり、主イエスはこの世に天国を宣べ伝えに来たことをよく示しております。

さて、その天国のたとえ話の中で教えられていますことは、まず天国は大きく増え広がっていく存在であること、そして次に天国に入る前に私たちは審きを受けねばならぬこと、誰でも無条件に天国に迎え入れられるのではなく、この世での信仰生活の実によって主なる神がそれを決められることです。

先日農業に詳しい方にお聞きしましたところ、からし種は大変に小さく、野菜の種の中でもっとも小さいのではないかということでした。しかし種が小さくても枝は大きく伸び、野菜の中で最も大きい存在になるということでもあります。最初は小さかったとしてもやがては比べるものがないくらい大きくなる。誰もそれを止めることは出来ないことが示されています。パンの譬えも同様です。パンは皆様も御存知のように酵母の働きによって膨らみますが、一見膨らみそうもないのに確実に大きく膨らむ、これが天国に譬えられるというのです。

また天国はこの世のどんな価値にも勝ることが教えられています。私たちが日頃考えている価値はすべて執着と言ってもよいという、衝撃的な内容です。

最後のところでは審きのことが言われています。網を入れるとか、刈り入れるというのは、聖書の中で大変多く用いられております審きの場面の譬えです。本日の聖書にありました、良いものは器に入れ、悪いものは投げ捨てるや、燃え盛る炉の中に投げ込むというのも同じ意味で使われております。悪はすべて天国に入ることが出来ないというのです。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろうという言葉はマタイによる福音書特有の言葉で、神の国をいち早く宣べ伝えられ、その招きにあずかったはずのユダヤ人が、歴史の中で正しく歩まず主なる神より悔い改めを促し続けられ、主イエスを救い主として受け入れず、神の国へ迎え入れられることが出来なかった姿を現しています。マタイはこのよ

うに書き記して、天国に入れないことを警告したのです。この警告は人々を恐れさせたり不安に陥れさせたりすることを目的としたのではなく、日々の生活において主の御心にかなうことを目指して歩む重要性を示しています。

主なる神は、このように天国を全ての人に来たらせることを決断しておられ、大きく増え広がることを望んでおられます。そして同時に悪をすべて滅ぼすことも決断しておられるというのです。主イエスが何故十字架にかからねばならなかったのか、それは私たちが罪を犯しながらしか生きて行けないことが証明しています。主イエスの十字架によってわたしたちは、罪を犯す者でありながら天国を迎え入れられる道を備えられたのです。「この小さな者の一人に、冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける」。私たちが救いに入ることが出来る確信を与えてくれる言葉です。

天国は、すべてが主なる神の御心のままに行われているところであり、悪もすべてが滅ぼされているところです。悪の故に人間にもたらされた死もまた滅ぼされるのです。天国を迎え入れられた者は、主なる神と相見え、永遠の命を与えられます。主イエスは人々に分かりやすく、譬えをもって天国の存在を教えられたのでした。

どうぞこのマタイによる福音書13章をよくお読みいただきまして、天国を今一度思い起こしてみましましょう。私たちのために主イエスが住まいを用意しに行くと言ってくださった天国に、私たちも一人残らず、迎え入れていただきたいものです。主イエスによる罪の赦しが完成した今、重要なのは私たちの信仰生活の実なのです。